

○朴 炳順

(\*東大・院)

**1. 目的** 2階建て民営アパートは戦後都市居住を大きく支えてきた都市型居住形式の一つであり、その実態を明らかにすることは都市居住形式のこれからのあり方を考える上で非常に重要である。そこで本研究は2階建て民営アパートの実態を明らかにするため、東京の一地域における変遷を追うことにした。

**2. 方法** 2階建て民営アパートについて建設の背景を把握するための建設関連業者に対するヒアリング調査と、建物の実態を把握するための外観調査を行った。また建築計画概要書より「2階建てかつ共同住宅」の条件に沿う建物の建設時期・構造などを特定し、それ以前のは住宅地図から建設時期を推定した。

**3. 結果** 外観調査を行った94件の2階建て民営アパートのうち77件の建設時期が確定でき、これらについて構造・プラン・材料等を分析した。**①構造の変化**—構造は昭和50年までは在来木造のみで、昭和50年代に入ると軽量鉄骨造・鉄骨造が登場し、昭和61年以降は木造以外の構造が半数以上を占める。**②形式の変化**—廊下においては昭和50年までは室内に廊下を設けているものが多いが、それ以降は外廊下のみ見られる。大家の住居との関係については昭和45年までに建てられた建物18件中10件が大家同居形式であったが、その後減を続け、平成3年から7年まで建てられたものにおいては9件中2件のみで減少傾向にある。**③材料の変化**—昭和45年以前のみ亜鉛鉄板や下見板が外壁及び雨戸の材料として使われているが、昭和60年以降はサイディングが増加している。以上から工務店と住宅メーカーの施工によるものの外見上の差が減少していることが確認された。